

京都大学	博士（文学）	氏名	洪 伊杓
論文題目	海老名弾正の神道理解と社会思想形成		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>1. 序論</p> <p>本論文では、先行研究の包括的な分析に基づいて、次のような問いが立てられた。すなわち、明治期における代表的な初期キリスト者である海老名弾正は、日本の近代化という変化の中でいかにキリスト教を受容したのか。また日本固有の宗教および思想である「神道」についてなぜ独特な解釈を試みたのか。彼にとって「キリスト教」と「神道」にはどのような関係性があるのか。この関係性の理解は彼の社会思想にどのような影響を与えたのだろうか。本論文は、近代日本キリスト教思想史研究における「宗教と国家」の問題を海老名弾正というキリスト者を中心に究明することを目的とする。</p> <p>第1部：海老名弾正の神道理解</p> <p>2. 松山高吉の「神論」中心的神道理解</p> <p>まず近代における日本キリスト者の神道理解の類型と系譜は次のようにまとめられる。宣教師エンソルに続き、横浜バンド出身の高橋五郎は宗教を「良教」と「妄教」という二つに分類し、神道は「妄教」に属すると否定的に評価した。しかし、国学者出身である松山高吉は異なる立場を見せる。松山は神道を「無名の宗教」と「有名な宗教」の二つの時期に分類し、神道の原始性を単純に多神教的あるいは迷信と断定せず、古事記における造物主である「天御中主神」の意義を特に強調し、キリスト教の「創造主」概念と調和させようと試みた。これは「天照大神」信仰や明治期から構築された近代天皇制(皇室・国家神道)を批判する立場となった。</p> <p>3. 海老名の「ロゴス・キリスト論」的な神道理解</p> <p>欧米宣教師に親近感を抱いていた松山に対して、海老名は反宣教師態度をとったが、両者の対立は、神道理解にも表れている。すなわち海老名は、当時の社会進化論に基づいて、原始神道を多神教的であり迷信的だと批判し、松山とは異なり、唯一神的高等宗教として進化発展して来た近代天皇制(皇室・国家神道)の中に日本的ロゴスの具体化(古来からの日本の「敬神」思想)を見出し、それとキリスト教を結合させようと試みた。それは、19世紀のドイツ自由主義神学、特にそのロゴス論に基づく歴史神学を、日本に適用し、キリスト教的ロゴスが復古神道と皇室の中で表面化したと</p>			

する考えであり、海老名は日本的ロゴス(天照大神・天皇・大和魂)とキリスト教が一致すると主張した。こうして、国民倫理として強調された「国家神道」が肯定されることになった。

海老名は、天御中主神を強調した松山に対して、「天照大神」こそ日本の「敬神」精神であるとし、さらに「天照大神」を異民族にも同等に伝えようとした黒住宗忠の教えに感化され、自らの神道理解(国家神道的キリスト教)を、欧米のキリスト教ではなく日本キリスト教こそが植民地伝道を担うとする「朝鮮伝道論」と結合した。これは、1930年代の諸論考では、帝国神道的キリスト教として顕在化し、倫理性にとどまった「国家神道」の限界を、黒住教が主張した「天照大神」の「宗教性・倫理性・世界性」とキリスト教とを「新日本精神」として結合することによって乗り越える試みとなった。このように、国家神道の倫理性と教派神道(黒住教)の宗教性を肯定し、キリスト教と神道を「ロゴス」という概念によって繋げようとした海老名の試みは「ロゴス・キリスト論的」な神道理解と解釈できる。

4. 海老名の「帝国神道的」キリスト教と弟子たちの「三位一体論」的な神道理解

海老名は、「天照大神」を宗教的な信仰の対象とした黒住教の教えに注目し、世界化・普遍化された「天照大神」をキリスト教の神概念と結合させようとしたが、これは次のような展開を示すことになる。すなわち、「内地日本」において「倫理」として機能している「国家神道」と、また「外地植民地」において「宗教・信仰」として機能すると期待された「帝国神道」を、「日本的キリスト教」が補完することによって、「帝国日本」が東洋において理想社会を形成するとの展望である。

海老名は近代的な「国民国家」の段階を経て「帝国」にまで至るプロセスを国家の進化発展過程であると考え、そのような理想的な帝国の達成こそがキリスト教的な「神の国」の実現であると信じた。こうして、海老名の神道理解は彼が構想した近代日本社会と帝国の理想像と直結することになる。キリスト者としての彼の神道理解を社会思想形成と合わせて考察する理由がここにある。

海老名の神道解釈は彼の弟子グループ、すなわち 1930-40 年代の組合教会の牧師や学者などによってより急進化して行く。たとえば、渡瀬常吉は古事記の「造化三神」をキリスト教の「三位一体」教理と同一視する神学的急進性を見せた。組合教会の信徒である法学者大谷美隆は、「天照大神」を強調しながら、三位一体論的な神道とキリスト教との結合を唱え、1930-40年代に盛んになった「現人神」概念をキリスト教思想によって弁護した。このように戦時下に現れた海老名の弟子たちの神道理解は、海老名の「ロゴス・キリスト論」的な理解を踏まえつつ、海老名の神道理解の論理的帰結を顕わにしたものと言える。1930-40年代の急進的な弟子たちの神道理解にとって、

海老名の教えは源流としての役割を果たしたのである。

第2部：海老名弾正の社会思想形成

5. 海老名と大正デモクラシー世代の神道理解と社会思想の形成

渡瀬、大谷のような神道理解を示した弟子たちがいる一方、いわゆる「大正デモクラシー」を導いた吉野作造、柏木義円、石川三四郎、中島重のような弟子たちは、渡瀬らと異なり、神道について批判的な立場を展開した。吉野は国家主導の「神社非宗教論」についてその論理的矛盾を批判し、柏木も神社参拝の参加は「宗教墮落及び偶像崇拜」であると神道に否定的であった。石川は『古事記』に描かれる神々の世界は私有財産を認めない共産社会であるとした。憲法学者であった中島重も「天皇機関説」を支持し、神道の「天孫降臨説」に基づいた「神権思想・天皇主権説」を受け入れなかった。さらに、海老名と論争を行なった賀川豊彦は、政府の神社非宗教論や天皇の神聖性を信ぜず、「神道の復活」を「悲しむべき後退」と表現した。このように、吉野らの神道理解は海老名とは根本的に異なっている。この相違は、キリスト教思想との関わりで、どのように理解すべきであろうか。

組合(会衆)教会の牧師であった海老名は、プロテスタンティズムにおける会衆主義を「統一・独立・自由」の精神と説明したが、これを日本と日本人に適用する際に、日本キリスト教を欧米キリスト教から自立させる議論を支えるものとなった。会衆主義は通常政治思想の領域における「デモクラシー」の源泉の一つとされるものであるが、海老名のデモクラシー思想は、欧米諸国とそのキリスト教からの日本の離脱と自主自立を強調する中で、「国家主義的」デモクラシーを経て「帝国主義的」デモクラシーへと変容していった。海老名は、国民の参政権については批判的であり、日本の自主独立、そして欧米と対立する日本帝国の建設こそがデモクラシーの完成であると考えた。このように、教会のデモクラシー論である「会衆主義」から出発した海老名のデモクラシー論は、独立・自由よりも、統一を上位に位置づけるものであり、天皇制を容認し、国民を「国家のため手段」するものとなった。

これに対して、吉野は海老名の国家主義を正当化する主張を本来のデモクラシー概念を歪曲するものとして批判し、柏木も新島襄から学んだ会衆主義とそれに基づいたデモクラシー論に従って、海老名とは明確に異なる立場に立った。すなわち二人は、海老名とは異なって、会衆主義における独立・自由の契機を生かす仕方でデモクラシー論を展開したのである。

6. 海老名と大正デモクラシー世代の「帝国」と「植民地(民)」理解

元来普通名詞であった「内地」という言葉は、日本帝国が植民地を確保して行く中

で「旧日本」、すなわち「本州・四国・九州のみを意味する固有名詞」へと変容する。これは「大和民族」が世界の中心、宇宙の真奥であることを強調するものであり、この固有名詞化の過程は、植民地としての「外地」と自ら（「内地」）とを質的に異なるものとして分離し、「日本帝国」の膨張を肯定する論理につながるものとなる。海老名はこの「内地」という用語を、渡瀬とともに積極的に受け入れる。それに対して、二人の朝鮮伝道論に批判的であった吉野や柏木は「内地」の使用に消極的であった。もちろん、吉野らにおいても「内地」という用語は散見されるが、そのほとんどが内地や内地人の政策と活動を批判する文脈で使われている。「内地」という新たな固有名詞を受容する態度にも日本固有の「神道」をどのような理解するかが関係している。なぜなら、「内地」は、「大和魂」、「八紘一宇」といった諸概念によって同心円的に描かれる帝国膨張の中心に位置するからである。

また、海老名は琉球人やアイヌはもちろん、朝鮮人や中国人、満州人など、当時日本帝国が占領し支配していた植民地の人々を「土人」と呼んだ。これは文明人としての日本人(内地人)が、外地人(植民地民)を未開の野蛮人として蔑視した言葉である。これに対して、吉野は植民地で蔓延している「差別」を批判するため「土民」という用語を使う。これは、「内地人」(日本人)と「外地人」(植民地民)が共に同じ日本帝国に属する「公民」として同等な「民権」を持つとの考えを背景にしている。この相違もまた、日本固有の神道をどう理解するかということと無関係ではない。

7. 海老名と大正デモクラシー世代の「神の国」と「社会主義」理解

海老名は地上における「神の国」と日本帝国と重ね合わせることによって、帝国が持つ「多民族性」を肯定し「国際主義」と「博愛主義」を強調した。しかし、「内地」と「土人」の問題において指摘したように、海老名の「国際主義」は、「内地=大和魂」に基づく「多民族的」ナショナリズム(国家主義)の構想に他ならない。これは、「国家神道」(内地における国民倫理)に対して、その宗教的性格をより前景化することによって植民地民を動員しようと試みた「帝国神道」に結び付いていた。

賀川豊彦は、海老名の国際主義の矛盾を批判し、海老名が日本をキリスト教化し、日本の国際性を確保するというよりは、むしろキリスト教を日本化する国粹主義に陥っているとして、それが「キリスト教の神道化」であると批判した。これは、海老名と賀川の「神の国」理解に相違に基づくものであり、その背景には互いに異なる神道理解が存在した。海老名は、「社会主義」と「社会的実践」の問題について、賀川と論争を行なったが、それは両者の「贖罪愛」解釈に介して、「社会主義」の評価にまで繋がっている。海老名は社会主義を批判し、賀川は社会主義を肯定した。柏木は賀川の活動を高く評価し、社会主義に欠ける部分はキリスト教が補完すべきであると主

張した。海老名の社会思想は「日本帝国」「帝国神道」と結ばれており、国家神道について否定的な姿勢を見せた賀川と柏木は「日本帝国」「帝国神道」に伴う「戦争と支配」を批判し、社会主義の人間平等主義に期待したのである。

8. 結論

キリスト教と神道を結合させようとした海老名弾正の姿勢は、「日本帝国」を地上における「神の国」実現であると捉えることによって、帝国の膨張に貢献するキリスト教理解を帰結した。その意味で、海老名のキリスト教は愛国のための手段と化してしまったと言える。海老名の社会思想形成の背後には、このような海老名における独特な神道的キリスト教の理解が存在していたのである。

(論文審査の結果の要旨)

1873(明治6)年のキリシタン禁教の高札撤去を経て、本格的に活動を開始した近代日本のキリスト教はさまざまな困難に直面した。この近代日本のキリスト教が置かれた問題状況を象徴する思想テーマとして、「日本的キリスト教」を挙げることができる。それは日本の宗教文化にキリスト教を根づかせようとする多様な思想的努力を包括するものであるが、海老名弾正は、この日本的キリスト教という問題において中心的かつ独自の位置を占めている。海老名弾正は、明治から大正期にかけての近代日本のキリスト教をリードした人物の一人であり、その思想的影響は、キリスト教界を越えて、植民地朝鮮における朝鮮総督府の宗教政策など広範に及ぶ。本論文は、こうした海老名弾正のキリスト教思想を、神道理解と社会理論、そして両者の関係性に注目して詳細に分析した思想史研究であり、これまでの海老名研究を大きく乗り越える研究成果が示されている。

本論文は、先行研究の緻密な分析とそれに基づく問題設定と方法論を扱った序論、そして結論のほか、第一部(「海老名弾正の神道理解」)と第二部(「海老名弾正の社会思想形成」)から構成され、二つの部にはそれぞれ3つの章が含まれている。序論では、日本における海老名研究だけでなく、中国と韓国における研究、英語圏での研究までが包括的に分析整理されており、それは今後の海老名研究の基盤となるものである。また海老名の思想を分析する方法論として、比較思想研究という方法が提示されたが、この方法に基づいて、第一部では、海老名の神道理解が海老名に先行するエンソル、高橋五郎、そして松山高吉の神道理解との比較を通して明確化された。これは、キリスト教思想における神道理解という新しい研究領域を切り開くものである。また第二部では、海老名の神道理解から社会思想の形成を論じる際に、海老名に続く世代の思想家との比較が有効に機能している。本論文の特筆すべき成果として以下の点が挙げられる。

まず、本論文の成果として指摘できるのは、海老名が論じる日本的キリスト教を神道的キリスト教として解釈することが可能かをめぐり、海老名研究上の従来からの論争に対して、本論文が説得的な仕方ですべて決着を付けた点である。しかも本論文では、1930年代(満州事変後)の海老名晩年期のテキストを詳細に分析することによって、そこに、1910年代までの国家神道的なキリスト教からも区別され植民地の状況に即した、帝国神道的なキリスト教と言うべき議論が確認された。海老名のキリスト教が神道的キリスト教としての内実を有したばかりでなく、そこに国家神道的から帝国神道的な段階への展開が見られるということは、海老名研究だけでなく、今後の日本キリスト教研究にとっても大きな意義ある研究成果と言える。

次に指摘したいのは、こうした近代日本のキリスト教思想で独自の位置を占める海老名のキリスト教理解が、いかなるキリスト教思想の伝統において可能になったのかについて、膨大な先行研究を参照することによって説明がなされた点である。海老名

のキリスト教思想については、植村正久とのキリスト論をめぐる論争などからわかるように、19世紀のドイツ自由主義神学の影響が明確に確認できる。本論文では、海老名の神道的キリスト教の議論がこの自由主義神学におけるロゴス論とそれに基づく歴史神学（キリストの出来事を中心として人類史全体において具体化・現実化したロゴスの歴史的展開が明治以降の日本神道にまで及ぶとの議論）によって可能になったものであること、またそれは海老名の社会思想の基盤となるキリスト教の会衆主義理解にも関連していることが明らかにされた。会衆主義理解は、同じキリスト教会衆主義に立つ海老名の弟子たち、たとえば、吉野作造や柏木義円らと海老名との社会思想における相違にも反映している。

さらに、本論文では、海老名の神道理解の意義あるいは問題点が、社会思想や社会的実践との関わりにおいて明らかにされた。松山との比較が示すように、海老名の神道理解は、明治維新と国家神道の評価をめぐる近代日本理解に関係しており、それは日本が帝国化する過程で、帝国神道に結び付くことになる。本論文では、この神道理解と社会思想のつながりが、海老名とその弟子たちの多岐にわたる広範なテキストの分析に基づき、民主主義や社会主義の理解、また内地や土人という用語・概念の使用において確認された。近代キリスト教の神道理解と社会思想との関係性が日本キリスト教研究の重要な論点となるということが、本論文によって説得的に示されたと言えよう。

このような優れた本論文についても、いくつかの問題点が指摘されねばならない。誤植や論述において厳密さを欠く箇所が散見されるだけではない。たとえば、比較研究という方法論については、思想家相互の複雑な関係性を整理するために有効である点を認めるとしても、そこには思想を過度に類型化しステレオタイプの議論となる危険が伴う。本論文でも、複雑な海老名思想が比較を通して単純化され、それに基づくやや強引なテキストの解釈が見られた。しかし、こうしたテキストの取り扱いにおいて改善すべき点が存在することは、論者の今後の研鑽によって克服することが十分に可能であって、本論文の価値を損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2019年9月26日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。